P2-052

医療的ケアを要する在宅重症児のきょうだ い支援に関する母親の質問紙によるニーズ 調査

古屋 悦世、鳥居 央子

北里大学 看護学部

【目的】

小児医療の急速な進歩や周産期医療の整備により、医療的 ケアが必要な重症児は増加傾向で、在宅療養期間も長期化 している。しかし、在宅重症児と家族のための地域支援は 少ないという実態があり、母親の介護負担は、生活をとも にする健常な兄弟姉妹(以下、"きょうだい"とする) に影 響を及ぼしている。きょうだいは、その成長過程で様々な 影響を受け、共通の特有な悩みと、得難い経験がそれぞれ あることが明らかになっている。本研究は、医療的ケアを 要する在宅重症児ときょうだいを養育している母親がもつ、 きょうだい支援のニーズについて明らかにすることを目的 とする。

【方法】

対象:1歳から18歳までの医療的ケアを要する在宅重症と 幼児期から青年期までのきょうだいを主に養育している母

調査期間:平成28年8月~平成28年12月。

データ収集方法: 在宅重症児が利用するいくつかの施設へ 依頼し、了承が得られた場合に、質問紙を施設に送付した。 内容:無記名自記式の自作の質問紙調査。平成26年度に実 施した医療的ケアを要する在宅重症児を養育する母親を対 象にしたグループインタビューより得られたきょうだい支 援のニーズである「きょうだいの子育てについて」、「きょう だいへのサポートについて」、「医療的ケアを要する重症児 も社会サービスについて」、「属性を把握する項目」について 全20項目とした。

分析方法:エクセルを使用し記述統計をおこなった。 倫理的配慮:研究者の所属期間の研究倫理委員会の承認を 受けて実施した。返送をもって研究参加同意とみなした。

【結果と考察】

全部で13施設に190部送付し、85部の返答があった(回収率: 44.7%)。既存のきょうだい会を利用している割合は1.15% と低くかった。ニーズが高かったのは、病院できょうだ いを安心して預けられる場の必要性で、"とてもそう思う" と"そう思う"を合わせて90.6%、きょうだい自身への社会 サービスの必要性が89.4%であった。また、母親がきょう だいについても語り合える機会の必要性についても同様に 87.9%であった。結果より、きょうだいへの支援については、 実際に利用できるまで広がっていないことが明らかになっ た。きょうだいへの直接的な支援と共に母親がきょうだい について気軽に語り合え、相談する場の充実が求められて

科学研究費課題番号(2686193)若手研究B「医療的ケアを要 する在宅重症児のきょうだい支援に関する基礎的研究」

P2-053

在宅重症心身障がい児の主な家族介護者の 社会資源活用に関連する認識の探索

西垣 佳織1、涌水 理恵2、藤岡 寛3、 沼口 知恵子⁴、佐藤 奈保⁵、松澤 明美6、 山口 慶子7、佐々木 実輝子7

- 聖路加国際大学大学院 看護学研究科、
- ²筑波大学 医学医療系、
- 3つくば国際大学 医療保健学部、
- 4茨城県立医療大学 保健医療学部、
- 5千葉大学大学院 看護学研究科、
- ○茨城キリスト教大学 看護学部、
- ⁷筑波大学大学院 人間総合科学研究科

【目的】

重症心身障がい児(以下、重症児)を自宅で養育する家族は 年々増加している。重症児の在宅療養を家族が無理なく継 続するには、社会資源の活用が重要である。そこで本研究 では、社会資源の活用に関する主養育者の認識の関連要因 探索を目的とした。

【方法】

全国の特別支援学校212校に通学する重症児の主養育者を 対象に、無記名自記式質問紙を配付した。目的変数は「社 会資源の活用の認識」とした。従属変数は重症児(重症児 スコア、年齢、過去1年間の身体的変化)、主養育者(性別、 介護負担感としてJ-ZBI8、夜間の睡眠中断の有無、就業の 有無、学歴)、家族(家族構成、家族機能FACESSKGIV-16、 家族エンパワメント尺度)の項目とした。訪問サービス(訪 問看護・診療等)と通所サービス(デイサービス等)の1週間 の利用時間を尋ねた。SPSS.24.0Jでステップワイズ法のロ ジスティック回帰分析(有意水準は両側5%)をした。

本研究は調査者所属機関の倫理委員会の承認を得て実施し、 対象者に書面で説明し返送で同意を得た。

【結果】

212校の内、協力の得られた89校4707家族にアンケートを 送付し、1659家族(35.2%)から返送があった。主養育者の 年齢は40代が最多(63.3%)、性別は女性91.8%、専業主婦 が最多(57.9%)、睡眠の平均は5.8±1.1時間、子どもの人数 は平均2.0±0.8人だった。重症児の年齢は平均12.0±3.6歳、 重症児スコアは平均11.0±6.7、社会サービスの1週間の利 用時間は、訪問平均2.1±4.8、通所平均6.7±7.1だった。主 養育者の社会資源活用の認識には主養育者の睡眠時間が長 く(p<0.01、オッズ比:1.40、C95% CI:1.16-1.62)、通所 系(p<0.05、オッズ比:1.10、95% CI:1.00-1.10)と訪問系 サービス利用時間が長く(p<0.01、オッズ比:1.10、95% CI: 1.03-1.09)、家族エンパワメント得点が高いこと(p< 0.01、オッズ比:1.01、95% CI:1.02-1.08)が関連していた。

【考察】

社会資源の活用には、サービス利用量を十分に確保できる 環境を整え、主養育者の睡眠が確保され身体的負担が過度 にならない支援が重要と考えられる。また家族が十分な機 能を発揮できるような支援も、求められる。